

# 令和元～3年度「学びの深化プロジェクト実施校」実績報告書(3年次)

## 1 学校名等

学 校 名	宇治市立南宇治中学校							校長名	村上 善輝
研究教科・領域等	全教科								
研 究 主 題	教科による見方・考え方を活かした「深い学び」の授業改善								
研究の目的	教科による見方・考え方を活かした「深い学び」の授業改善に取り組むことによって、生徒が知識・技能を活用し、思考、判断、表現する中で、学び直しや気付きを得て、自己調整を行い、継続して学習する力を身に付ける。								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別	合 計	教職員数
学 級 数	2	3	3				2	10	27
児 童 生 徒 数	67	88	84				10	249	※校長・教頭を含む

## 2 研究校の概要

### (1) 児童生徒の実態

本校は、中国からの帰国生徒等、外国にルーツのある生徒が在籍し、言語的な面で支援を要する生徒等、個別最適な学びや協働的な学び、多様な視点に立った教育活動が必要である。

令和元年度当初、生徒の現状を把握するために行ったSWOT分析からは、「強み」として「素直である」「男女の仲が良い」「話し合える」「違いを認め合える」、「弱み」として、「学習の未定着が多い」「活用力が乏しい」「語彙が少ない」「文章・課題を読み取る力が弱い」点が見られた。

### (2) 学力状況(分析)

【令和元年度京都府との数値比較(全国学力・学習状況調査及び京都府学力診断テストより)】

国語科については、ことばの意味やことばの使い方が曖昧である。数学科については、知識を複合させて理解することやその活用の仕方が不得手であり、四則計算や分数など基本的な知識・技能の習得が不十分で、活用しきれていない。英語科については、内容の理解はある程度できるものの、その内容を伝えるための文法や語彙の使用の仕方、時制についての部分が不得手で、語彙や熟語、文法など、基礎的基本的な事項についての定着度が低い。このような課題は他の教科でも共通しており、基礎・基本の定着と教科横断的に課題探究型の学習を行う必要がある。

### (3) 研究体制

「学びの深化プロジェクトチーム」を核として、3分科会「授業改善部」「学力分析部」「基礎・基本定着部」を設定し、全教職員がいずれかの部に所属した。「学びの深化プロジェクトチーム」のメンバーは、「研究主任、教務主任、中核教師」で構成し、生徒の実態から本校が目指すべき学びの姿や目標を示し、研究全体の軌道修正を図りながら進めた。「授業改善部」は、「学期ごとに授業を考える期間」を設定し、授業に向けた事前研修や事後研修を通して、全員で授業力を磨くように促した。「学力分析部」は、全国学力・学習状況調査や京都府学力診断テスト、学期ごとの教科アンケートの分析を行い、実践の検証や課題を明確にした。「基礎・基本定着部」は、授業の中で課題がどのように位置づけられているのかを可視化して各学年のフロアに掲示し、意識的に学習の話題ができるように仕掛けた。

### 3 主な研究活動

『見方・考え方を活かした「深い学び」の授業改善』に向けた授業研究を行った。

#### (1) グランドデザイン・学習のグランドデザイン

何のために日頃の教育活動を行っているのか、学習活動を行っているのかを確認するために、グランドデザインの共通確認を行った。(図1・2)

図1

#### ○学校教育目標

「未来をみつめ、強く正しく生きよう」→目指す大人像！

#### ○学習 面から

「未来をみつめ生きる」ために

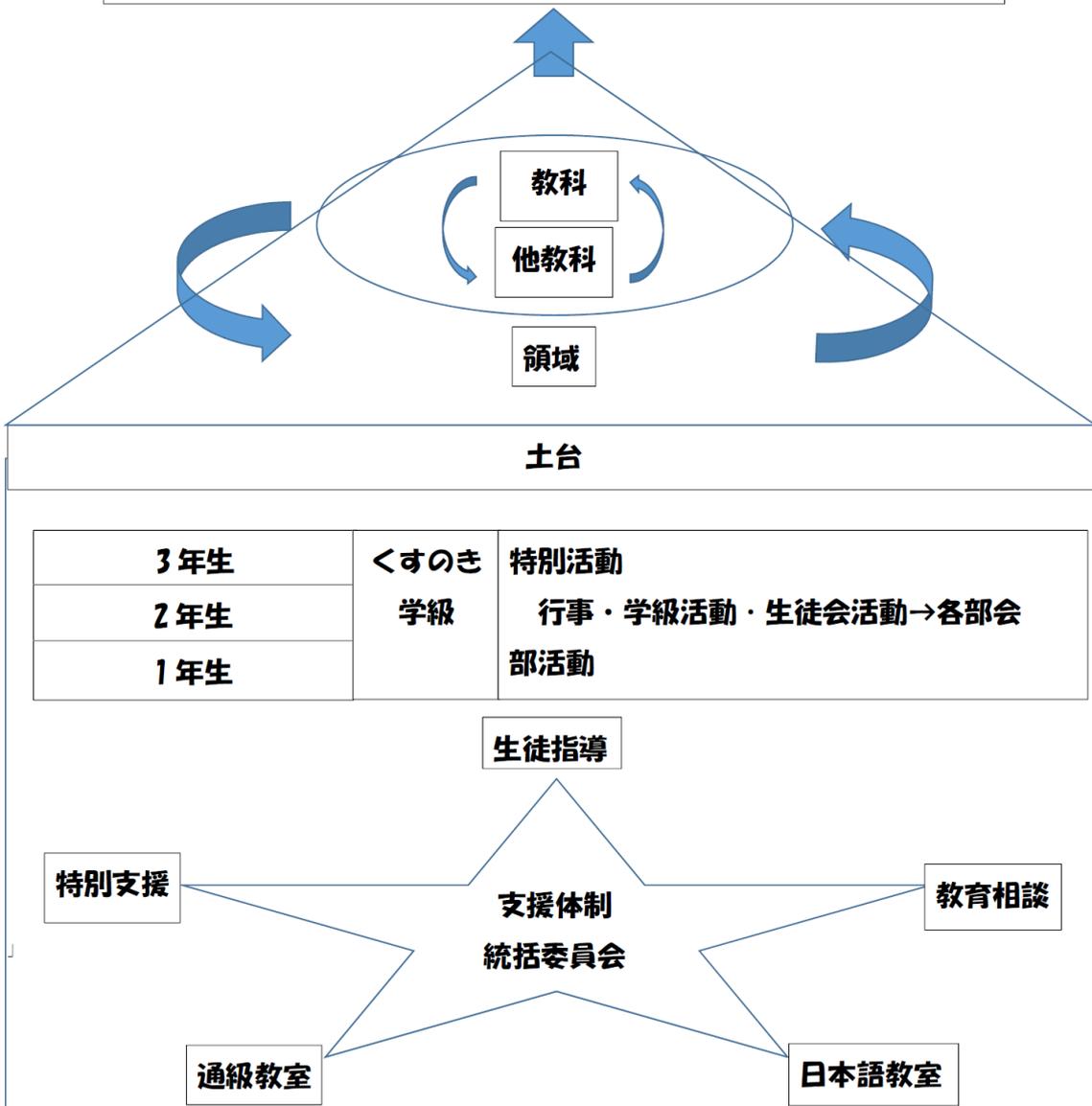
～学校で**学び**、**学びを活用**し、**課題や疑問を発見**、**解決する力**を身に付ける～

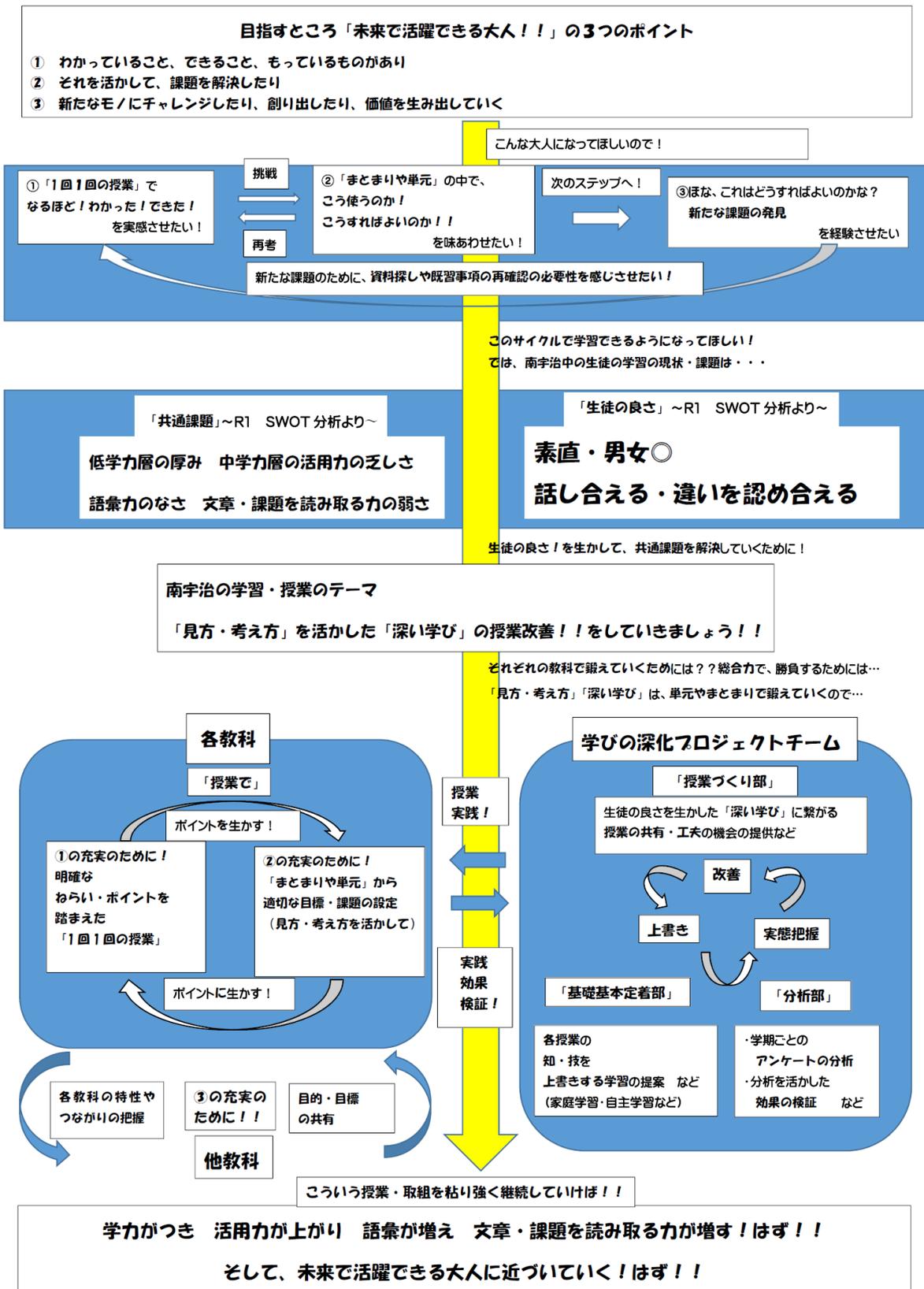
#### ○生活 面から (土台！)

「未来を強く正しく生きる」ために

～学校で、**いろいろな経験**を通して、**多くの考え方・生き方に触れ**、**成長する**～

**未来をみつめ、強く正しく生きる力！**





(2) 授業の作り方

1 単位時間の授業の構成を考えやすくするために、「教科ごとの見方・考え方」を根拠にした適切なめあて・ねらいを作成する表を作成した。さらに、1 単位時間の目標達成に向けての授業構成の表作りが、「単元(題材)設計テンプレート」に繋がった。

### (3) 実践

今年度は、「国語・社会・数学・理科・音楽・保体・英語」の授業研究を行った。

#### ① 研究授業に向けた事前研修

授業研究に向けて、教科部会で、単元目標の設定、単元の指導構想を考えた。教科部会を繰り返し、単元目標を達成できたかを把握するために必要な課題を考えた。そして、単元目標と単元課題が定まったのち、単元課題を解決するために必要な1時間単位のねらいやめあてを構想した。

#### ② 校内研究授業

授業参観シートを用い、「単元の目標」から「本時の目標」に、どれだけ近づき、達成したか、また、「授業のポイント」をどのように実践できたかを、「生徒の反応・様子」を中心に参観した。参観では、授業内容の中で確認したいことや、授業者が気付きにくいであろう点もメモとして残した。

#### ③ 事後振り返り

授業提供者は、「単元の構想について」と「授業実践について」の振り返りを行った。参観者は、「本時のねらい・ポイントに近づいていたか」「生徒の学習の様子から」という視点で授業を参観し、振り返りを行った。

## 4 今年度の研究の成果と検証

### (1) 教職員の授業計画・評価・授業スキル、及び授業を参観する視点や学び方について

事前研修で、「教科の見方・考え方を活かし、思考を深める課題」を、単元やまとまりを意識しながら考え課題を解決するために、1単位時間のねらいやめあてを明確にした授業を行った。

### (2) 生徒の学習目的意識・内容・学力の向上について

図3は、今年度の生徒の変容を表すアンケート結果をまとめたものである。

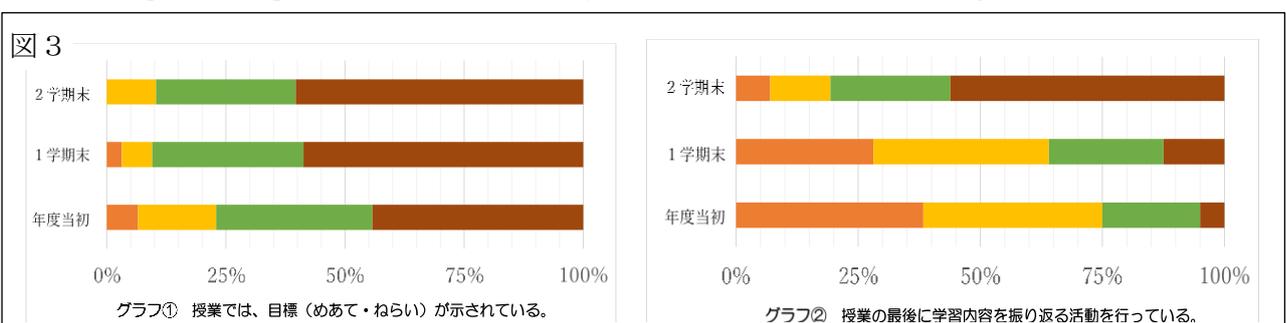
左から「当てはまらない」「少しあてはまらない」「少しあてはまる」「あてはまる」を表している。

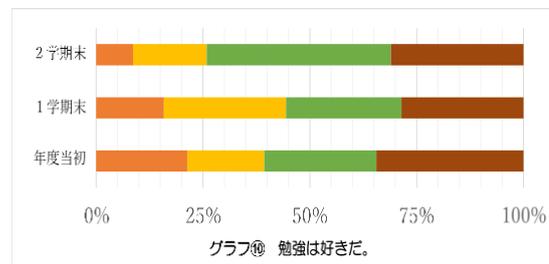
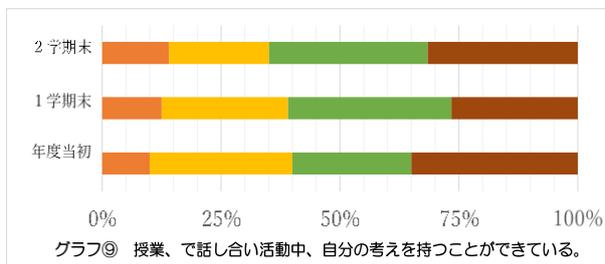
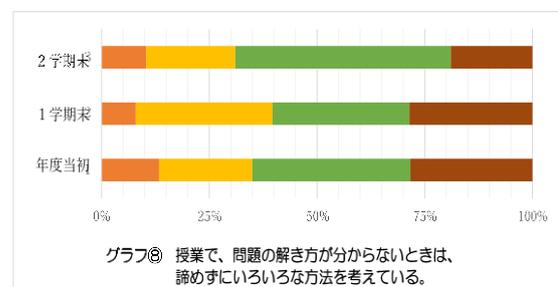
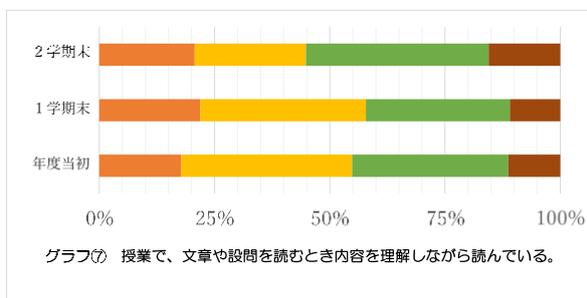
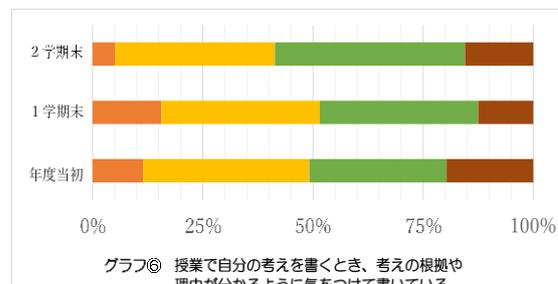
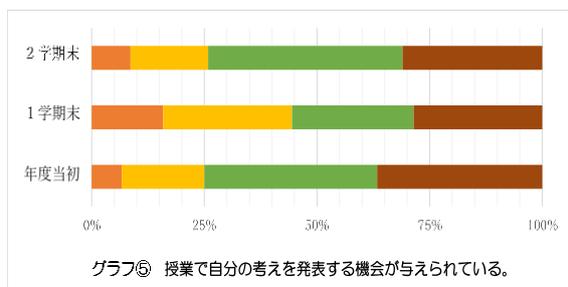
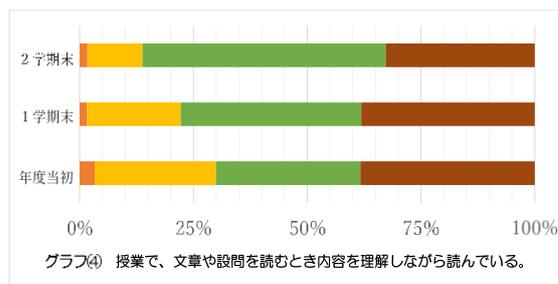
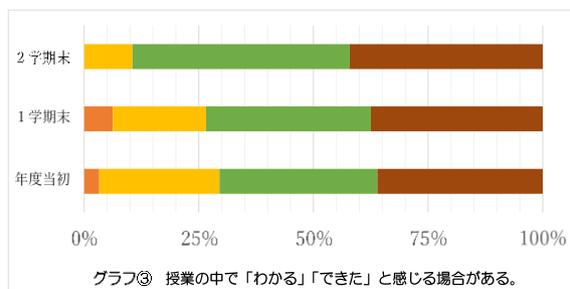
グラフ①では研究を進めるごとに「めあて」が示されていると感じている生徒が増えている。同様にグラフ②では「振り返り活動」を行っていると感じている生徒が増えている。これらは教師側の意識が変わった結果であると言える。グラフ③で、授業の中で「わかる」「できた」と感じる、グラフ④で「内容を理解しながら読んでいる」と答えた生徒が、グラフ①②と比例して増えているのが成果である。

また、グラフ⑤の「自分の考えがうまく伝わるように発表する」、グラフ⑥の「自分の考えの根拠や理由がわかるように書く」、グラフ⑦の「内容を理解しながら読んでいる」など、思考・判断し表現する力と深く関連していることがわかる。

そういった力が付くことで、グラフ⑧「あきらめずに考える」、グラフ⑨「自分の考えを持つ」力の育成につながっていると考える。

この分析から、目標（めあて）を適切に示し、目標達成に向けて発表する機会を設定することで「わかる」「できた」につながり、教科の学習（勉強）が好きになると考えた。





## 5 今年度の課題

研究を通して、学びの方向性を見出すことができた。ただ、コロナ禍で計画の変更が余儀なくされ、実践や考える機会が少なくなった。また、実践の振り返りについても、実践者や授業参観者のみに限定し、よい考えや実践を広げるために、計画的な事後研修の機会の確保が困難であった。さらに、こうした状況下であっても、授業改善のために何ができるのか、何が考えられるのか、継続的・同僚性を大切にしたい授業研究を進めていきたい。

## 6 研究成果の活用について

まとめりや単元で「教科による見方・考え方」を活かし「深い学び」につながる授業を作っていきたい。アンケートの分析結果で明らかとなった課題に見合ったねらい（単元・1単位時間等）を設定できるように、各教科部会を中心に、横断教科部会等を活用した PDCA サイクルが必要である。さらに、教科の垣根を超え、学校全体で授業改善の方向性について話し合いを行う機会を計画したい。

「シンプルかつ分かりやすい」を心掛け、本校の授業、学びの取組が継続できるよう、年度当初に共通認識の徹底を行いたい。